

中海浅場機能基本調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

佐々木 正・三浦常廣・勢村 均

1. 研究の目的

中海最大の浅場水域である本庄水域においては、森山堤の開削等による環境変化により、今後、魚介類資源に変化が生じる可能性が考えられていることから、有用魚介類の資源状況および環境の変化を把握するとともに資源の増殖や有効利用の方法について検討する。

2. 研究方法

(1) 漁業実態調査

柁網 3 地区（万原、本庄、意東）、刺網 1 地区（江島）において標本船調査を行った。柁網 2 地区（本庄、東出雲）については月 1 回の頻度で漁獲物の買取り調査を実施した。

(2) アサリ・サルボウガイ分布生態調査

アサリの成熟度：月 1 回の頻度で外江、大海崎沖における漁獲物の成熟状態を観察した。

アサリ浮遊幼生の分布：6、7、10 月に中海に設けた 15 定点においてポンプアップにより浮遊幼生の採集を実施し、幼生をモノクローナル抗体法により同定、計数した。

アサリ稚貝の分布：2 ヶ月に 1 回の頻度で中海全域に設けた 11 定点において採泥を実施し、アサリを計数後、殻長を測定した。

サルボウガイ浮遊幼生の分布：8 月に中海全域に設けた 11 定点の中層に採苗器を設置し、12 月に回収して付着した稚貝を計数した。

サルボウガイの大量採苗：8 月に中海中央（水深 7m）、意東沖（水深 5m）に採苗器 240 個（各 120 個）設置し、12 月に回収した。

サルボウガイの中間育成：前年度 12 月に取上げた平均殻長 13 mm の天然採苗種苗 76,000 個を意東沖の施設において垂下飼育した。

サルボウガイの種苗放流：7 月に江島沖、意東沖に平均殻長 24 mm の種苗をそれぞれ 4 万個、1 万個を船上から放流した。江島沖については 8 月、翌 3 月にスキューバ潜水によ

り追跡調査を実施した。

3. 研究結果

(1) 漁業実態調査

刺網では周年漁獲されるスズキ、ボラを主体に夏季にヒイラギ、春季にコノシロが漁獲された。柁網では各地区とも漁獲の主体はスズキ、コノシロ等であったが、サッパ（東出雲）、アカエイ（本庄）、タイワンガザミ（万原）等、地区により出現傾向が異なる種があった。

(2) アサリ・サルボウガイ分布生態調査

アサリの成熟度：肥満度は春季から夏季にかけて低くなり、生殖巣組織の観察から産卵によるものであると推察された。

アサリ浮遊幼生の分布：幼生は 6～10 月の調査で確認され、その出現数は 10 月の調査が最も多かった。

アサリ稚貝の分布：稚貝の採集数は 7 月までの調査では平年とほぼ同様であったが、9 月以降の調査では採集数が多くなる傾向（平均値で平年の 2～3 倍）が認められた。

サルボウガイ浮遊幼生の分布：採苗器における中海（本湖）の各定点での採集数は昨年より減少したが、本庄水域での採集数は昨年よりも多い傾向が認められた。

サルボウガイの大量採苗：採苗器における稚貝の採集数は、平年より少なく、中海中央の施設では採苗器 1 個当たり数百個、意東沖の採苗器では数十個とごく僅かであった。

サルボウガイの中間育成：6 月に平均殻長 22 mm の種苗 73,000 個を取上げ、約 6 ヶ月間の歩留りは 95% と良好であった。

サルボウガイの種苗放流：江島沖において放流 8 ヶ月後に実施した調査から、放流貝の平均殻長は 33 mm、推定歩留りは 68% と推定された。